大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第二十一卷　第五號

大正十四年十一月一日發行

（禁轉載）

論叢

人間愛の起源……教授　川村多實二

租稅公正の實現難……法學博士　神戸正雄

現象學的基本考察……文學博士　米田庄太郎

時論

關稅特別會議に就て……法學博士　末廣重雄

勞働組合主義と集合契約……法學博士　河田嗣郎

說苑

金利と物價との相關關係に就て……經濟學士　谷口吉彥

歐洲に於ける家產運動及び家產制度……經濟學士　八木芳之助

スミスの植民地論について矢內原教授の教を乞ふ……經濟學士　長田三郎

雜錄

生計調査より觀たる租稅負擔……法學士　汐見三郎

法令

重要輸出品工業組合施行規則・輸出組合法施行規則

附錄

本誌第十一卷乃至第二十卷論題索引

現象學的基本考察

（フッサールの現象學五）

米田庄太郎

六　現象學的基本考察

A、自然的立場
B、現象學的判斷抑制
C、現象學的判斷抑制によりて現象學的立場の確立される一般的方針
D、純粹意識の領域
E、現象學的還元

フッサール氏は「純正現象學及び現象學的哲學考」に於て、先づ前節に於て述べし如く、事實及び事實學に對立させて本質及び本質學を概論し、以て純正現象學の觀念の建設の爲め、又一切の經驗學に對する其の地位の理解の爲めに必要なる本質的基礎を究明したる後、先づ「現象學的基本考察」と題して現象學の基本的諸問題を論究し、次に「現象學の方法論及び問題論に就て」と題

して、現象學の方法及び問題の一般を論述し、終りに「理性と現實」と題して、「ノエマチッシェ意義及び其の對象との關係」、「理性の現象學」及び「理性理論的問題論の普遍性階段」を論究して居る。然るに本論文に於て余の特に考察したいと思ふのは、現象學の方法論であるから、隨ふて之を比較的に稍々詳しく論述したいのであるが、併し之をよく理解する爲めには、他の諸問題に關するフッサール氏の思想の一般を理解して置かねばならぬから、是れより先づ「現象學的基本考察」の大要を述べることゝする。

今フッサール氏の現象學は、同氏が自然的立場（die natürliche Einstellung）と稱するものゝ根本的改變を必要條件として立てられて居る。然らば其の自然的立場と稱するは如何なるものであるか、又夫れは如何にして根本的に改變されるか。

A、自然的立場　自然的立場の一般的正定（テーゼス）或は主張は、左の如く云ひ表はされる。即ち我は我に對立するものとして、一の空間的時間的現實態が常に現存するを見出し、そうして我自身も亦、其の現實態の中に現存し、我と同じ仕方で夫れに結び附けられる他の人々も、共に其現實態に屬する。我は「現實態」を存在するとして見出し、又我に與へられるがまゝに存在するとして夫れを受け取る。世界は現實態として常に眼前に在る。そうして之を素朴的經驗知識の成就し得るよりは、一層包括的に、一層確實に、又總ての關係に於て一層完全に認識し、其の地盤に於て現はれ

る學問的認識の一切の問題を解決するのが、卽ち自然的立場の諸學問の目標である。

然らば右の如き自然的立場は、如何にして根本的に變更され得るか。それは現象學的判斷抑制によりてゞある。

B、現象學的判斷抑制 (die phänomenologische Epochē) デカートは總てを疑ふて見ることから出發して居るが、吾人は同樣な見方で自然的立場の根本的變更を企だて得る。併し余輩の現象學的判斷抑制と云ふは、其の目的及び意味に於て、デカートの疑ふて見ると云ふことゝは、異なれる點を有する。要するに余輩は疑ふことを、吾人が全く自由になし得る補助的一手段と見做し、又之を正定(ティージス)を反定に、肯定を否定に轉化することゝ解せず、或は正定、肯定を臆測、好惡、不確實等に轉化することゝも解せず、正定肯定をあるがまゝに存續させて置いて、しかも之を云はゞ「作用或は働きの外に置くこと、働かせないこと、運用しないこと」(ausser Aktion setzen)、「絕緣すること或は連結を斷つこと」(ausschalten)「括弧に入れることと」(einklammern) と解するのである。(但し此の場合に正定は尙ほ存續するので、恰も括弧に入れられたるものが括弧の中に存續し、絕緣されたるもの或は連結を斷たれたるものが、連結の外に存續するが如くである。)換言すれば夫れは正定は體驗であるが、併し吾人は之れに付て全く何等の使用をもなさないことを意味するのである。そうして吾人は各正定(ティージス)に對して、完全なる自由に於て、右の特異なる Epochē

卽ち眞理に就ての動搖されない、つまり明證的なるが故に動搖され難き確信と、相和合して行く處の一定の判斷抑制を、行ない得るのである。

併し吾々は右の判斷抑制の普遍性に或制限を加へねばならぬ。是れ若し何れの正定或は判斷も、全く自由に改變されるとすれば、何等の範域も最早改變されない判斷の爲めに、隨ふて學問の爲めに殘存しないことになるが、然るに吾々の狙ふ處は、まさしく括弧に入れる方法によりてであるが、しかも一定の制限されたる其の方法によりて獲得さる可き、一の新しき學問的領域を發見することにあるからである。此處に吾々は右の見地からして、先づ現象學的判斷抑制に就て、一般的に左の如く述べて置く。卽ち吾々は自然的立場の本質に屬する一般的正定或は主張を、作用或は働きの外に置き、或は運用せず、本體的關係に於て夫れを包む總てのものを括弧に入れる、かくて常に吾人に對して現存し、又吾人が假令括弧に入れても尙ほ常に存續するであらう處の、其の全自然的世界を括弧に入れる。吾人は吾人の完全なる自由に於て之をなす。されば吾々は詭辯論者の如く此の「世界」を否定するのでも、亦懷疑論者の如く此の「世界」の存在を疑ふのでもない。併し吾々は空間的時間的存在に關する總ての判斷を吾々に閉封する處の、現象學的判斷抑制を行なふのである。かくて吾々は此の自然的世界に關する一切の學問を如何に確實なるものと認めるとも、其等の學問の妥當に就ては、絕對的に何等の使用をもなさないのである。

フッサール氏の云ふ現象學的判斷抑制とは何を意味するかは、右に述べし處によりて大體上說明されて居ると思ふが、然らば同氏は此の現象學的判斷抑制なるものによりて、如何に自然的立場を根本的に變更し、そうして新しき立場卽ち現象學的立場を確立せんとするか。同氏は先づ其の一般的方針を簡單に約述し、それより詳細に論述して居るのであるが、此處には其の詳細なる論述に就て一々述べることは出來ないから、先づ其の一般的方針を述べ、次に其の詳細なる論述中の或物を述べて、以て同氏の思想の一般を示すことゝしたいと思ふ。

C、現象學的判斷抑制によりて、現象學的立場の確立される一般的方針、今現象學的判斷抑制によりて、全世界が絕緣され或は括弧されるとすれば、其の後に何物が殘るか。若し何物も殘らないとすれば、新しき立場、現象學的立場の成立する餘地が全くないことゝなる。併し余輩が現象學的判斷抑制を行なふのは、つまり自然的世界の絕緣によりて、新しき實在領域を見出すが爲めであるので、かくて余輩は其の絕緣の後に或物の殘ることを始めから前定して居るのである。是れさきに述べし如く、現象學的判斷抑制の普遍性に、一定の制限を加へねばならぬと考へる所以である。そうして此處に其の殘存するものは何であるかを究明して、現象學の分野を決定する爲めに、自然的立場に於ける意識の考察から出發し、現象學的判斷抑制によりて段々に進み行くことゝする。

夫れ自然的立場から考察すれば自我、現實人は自然的世界に於ける他のものと同じく、一の現實物である。自我は廣い及び狹い意味に於ける「意識作用」を行ない、そうして其等の作用は其の人間的主體に屬するとして、自然的現實態の出來事である。自我の餘他の體驗もまさしく同樣である。そうして意識と云ふ語は、其の最廣義に於ては一切の體驗を包括する。吾人は確定せる習慣に從ふて、學問的思惟に於ても亦矢張り自然的立場に置かれて居るから、吾人は其等の心理學的反省の發見物總體を、現實的なる世界的出來事として、まさしく動物的存在物の體驗として承認する。そうして其等の發見物を右の如きものとして見ることは、吾人にとりて甚だ自然的であるので、今や吾人は變更されたる立場の可能を既に熟知し、新しき對象範域を探求して居ても、尙ほまさしく其等の體驗範域からして、新しき立場によりて新しき範域が生れ出づるのであることを、全く注意しないほどである。嘗て我々が其等の體驗範圍に我々の注目を向けて置かず、轉じて算術、幾何學等の本體學的諸世界に於て新しき對象を求めたのは、（夫れによりて確かに、嚴密に云ふ新しき何物も、得られる可きではなかつたであらうが）右の事實と親密に關係して居る。

それで我々は我々の注目を意識範圍に向けて置き、そうして其の中に我々が內在的に見出す處のものを研究する。先づ我々は尙ほ現象學的判斷抑制を行はずして、意識範圍を一の組織的本質

分析(決して十分なものでないが)に附する。此處に我々にとりて是非必要なるものは、意識一般の本質、殊に其物自身に於て、其の本質に從ふて(意識に付て云ふ)、自然的現實態が意識される限りに於ての意識の本質に關する一定の一般的洞見である。余輩は此等の研究に於て、余輩の狙ふ處の其の洞見、卽ち意識は夫れ自身に於て、一の特有實在を有し、そうして其の特有實在は其の絕對的特有本質に於ては、現象學的絕緣に襲はれないものであると云ふ洞見を、完成するに必要なる程度まで進む。かくして意識は「現象學的殘餘」として、一の根本的に特異なる實在領域として殘存し、そうして夫れが實に一の新しき學、卽ち現象學の分野となり得るのである。

右の洞見によりて現象學的判斷抑制は、始めて其の名に値するものとなり、そうして其の完全なる遂行は、吾人を純粹意識及び更に全現象學的領域に親近せしめる必然的操作(オペラチヨン)として展開するであらう。又まさしく夫れによりて、何故に此の領域及び之れに屬する新しき學が、是れまで認知されずに止まらねばならなかつたが、理解されるであらう。自然的立場に立つ以上は、自然的世界以外の何物も見られ得ない。現象學的立場の可能性が認識されず、夫れに相應する對象を原本的に把捉する方法が發達しなかつた以上、現象學的世界は未知な、殆んど豫感さへされない世界として、止まつて居なければならなかつたのである。

我々は認識論的問題論に基因する重要なる動機によりて、純粹意識を又先驗的意識と稱し、更

に夫れが獲得される操作を、又先驗的判斷抑制と稱し得ると思ふ。そうして此の操作は方法的には「絶緣すること、或は連結を斷つこと」、「括弧に入れること」の諸步武或は諸階段に分割されるので、かくて我々の方法は一の一步一步的還元の性質を有するであらう。されば我々は之を現象學的還元（die phanomenologische Reduktion）と稱し、そうして特に認識論的見地から見る場合には、先驗的還元（die franszendentale Reduktion）と稱するであらう。

フッサール氏が現象學的判斷抑制によりて、現象學の分野たる純粹意識或は先驗的意識の領域に到達せんとする途行の一般的方針を、右の如くに述べ、夫より詳しく論述して居るのであるが、此處には只同氏が純粹意識の領域及び現象學的還元に就て論述して居ることを、少しく述べるだけに止める。

D、純粹意識の領域　フッサール氏が詳細に論述する處によれば、意識或は體驗の內在的實在は、夫れは根本的には何等の物（res）の存在するを要しないと云ふ意味にて、絶對的實在であるが、然るに意識に對して超越的なる物（res）の世界は、全く意識に依存する。かくて意識或は體驗と現實的實在とは、決して平和に共住し、時々相互に結び附けられ、或は相互に結合する處の、同位的な二種の實在であるのでない。意識と現實的實在との間には、意味の眞實なる割目が存立する。後者は「影附けられる」、決して絶對的には與へらる可からざる、單に偶然的にして相

對的なる一の實在にして、前者は「影附けること」(Abschattung)及び顯現によりて根本的に與へらる可からざる、一の必然的及び絶對的なる實在である。意識は其の純粹性に於て考へられると、夫れ自身に對して完結せる實在連結或は結合として、絶對的實在の一連結として認めらる可きものである。其の連結或は結合は何等の空間時間的外部を有せず、何等の空間時間的連結中にも存在し得ない、又何等の物からも因果作用を受けねば、何等の物の上にも因果作用を及ぼし得ない。然るに全空間時間的世界は、其の意味に於ては全く志向的實在である、かくて意識に對しては、實在の全く第二次的、相對的意味を有する處のものである。夫れは意識が其の經驗に於て設定する處の一の實在、根本的には只一義的に意味附けられたる、顯現多樣の同一者としてのみ、直觀し得られ規定し得られ、夫れ以上には何物でもない處の一の實在である。

かくて普通に吾人に對して第一の實在と考へられるものは、夫れ自身に於ては第二の實在、即ち只第一の實在との關係に於てのみ實在する處のものである。夫れは夫れ自身に於て絶對的な或物にして、第二次的に他の物に結び附くのでなく、絶對的意味に於ては全く無にして、全く「絶對的本質」を有しない。夫れは根本的には只志向的なるもの、只意識されたるもの、意識的に表象されたるもの、顯現する處のものに外ならぬ處の或物の本質性を有するだけである。

今自然的理論的立場(其の相關者は世界である)に對して、一の新しき立場、即ち心理的物理的

全自然の絶縁に拘らず、其のあとに或物卽ち絶對的意識の全分野を保持する立場が、可能でならねばならぬことは、明らかに理解される。かくて我々は經驗に於て素朴的に生き、經驗されたるもの、卽ち超越的なる自然を、理論的に探究するのでなくして、現象學還元を遂行するのである。換言すれば自然を構成する意識に屬する諸作用を、其の超越的主張（テーゼン）を含めて、素朴的な仕方に於て遂行し、其等の作用の中に存する動機作用によりて、益々新しき超越的主張を立て行くのでなくして、我々は其等の主張を「作用或は働きの外」に置き、之を運用しない。そして我々は我々の把捉し理論的に探究する目を、其の絶對的特有實在に於ける純粹意識の上に向ける。かくて我々は全世界を絶縁したに拘らず、求められたる「現象學的殘餘」として殘存するものが、發見される。我々は全世界の絶縁によつて、本來何物をも失はないので、否な夫れによりて全絶對的實在を獲得するのである。そうして其の絶對的實在は正當に理解すれば、一切の世界的超越物を夫れ自身に於て包藏し、夫れ自身に於て之を「構成」するのである。

尙ほ少しく說明を加ふれば、自然的立場に於ては、我々は依て以て世界が我々に對して其處に存する一切の作用を卒直に遂行する。我々は知覺及び經驗に於て生きて居る。我々は物が我々に現はれ、否な單に現はれるだけでなく、「現存し」、「現實的に有る」と云ふ性質を具して我々に與へられる處の、其等の作用に於て生きて居る。我々は自然科學によりて、經驗論理的に調整され

たる思惟作用を遂行するが、其等の思惟作用に於て、與へられるがまゝ受けられたる現實的なるものが、思惟的に規定され、又かゝる直接に經驗され規定されたる超越的なるものに基いて、新たに超越的なるものが引き出される。然るに現象學的立場に於ては、我々は總てのかゝる思惟的主張の遂行を、根本的普遍性に於て拘束する、即ち其等の遂行されたる主張を「括弧に入れ」新しき研究に對して全く之を運用しない。我々は其等の主張に於て生き、其等の主張を遂行するのでなくして、其等の主張の上に向けられたる反省の作用を遂行し、そうして其等の作用其物を絶對的實在として把捉する。今や我々は全く右の如き第二段の作用に於て生きるので、そうして其の所與は絶對的體驗の無限なる分野、即ち現象學の基本分野である。

此處に我々が特に注意す可きは、我々が現象學的還元の形式に於て全世界を視界の外に置くことは、包括的連結或は結合から其の諸成素を抽象することゝ、全く異なれる或物であると云ふことである。意識體驗が自然との密接なる關係なしには考へ得られないならば、(例へば色は廣がりなしに考へ得られない如く)、其の場合には我々は意識を、我々がなさねばならない樣な意味で、夫れ自身で一の絶對的に特有なる領域と認めることが出來ない。そうして自然からの「抽象」によりては、只自然的なるものが得られるだけで、決して先驗的な純粹な意識が得られるものでないことが、よく理解されねばならぬ。更に現象學的還元は單に現實的實在全體の連結的一部分に、

吾人の判斷を制限することを意味するものでない。總ての特殊的實在科學に於ては、理論的關心は總現實態の特殊的一範域に限られて居る。そうして餘他の諸範域は、夫れに亘る現實的關係が調停的研究を强要しない以上、考察外に置かれる。かゝる意味にて力學は光學的出來事から抽象し、物理學は一般に又最廣義に於て、心理學的なるものから抽象する。しかも各自然研究者の熟知する如く、何れの現實領域も孤立して居ないので、全世界はつまり一の唯一自然にして、一切の自然科學は唯一の自然科學の諸節である。然るに絶對的諸本質としての體驗の領分にありては、根本的本質的に異なつて居る。此の領分は夫れ自身に於て確實に完結され、そうして他の諸領域から之を分別する限界を有しない。是れ此の領分を限界附けるものがあるとすれば、其のものは此の領分と本質共同性を有せねばならぬからである。然るに此の領分は我々の分析が明らかにする一定の意味に於て、絶對的實在の全體である。夫れは其の本質上一切の世界的自然的實在から獨立し、其の存在の爲めには一切の世界的自然的實在を要しない。自然の存在は意識の存在を制約するものではない。是れ自然其物は實に意識相關者として、設定されるものであるからである。要するに自然的立場或は其の一般的主張（テーゼス）を絶緣（アウスシャルツング）するものとしての現象學的還元は可能にして、そうして夫れが完成されると、殘餘として絶對的意識或は先驗的純粹意識が殘存するが、其の意識は最早現實的實在と考へらる可きものでなく、現實的實在から獨立して存在し、之

を其の相關者として志向的に設定するものである。

E、現象學的還元　先驗的純粹意識に注視を向けることを、一般的に可能ならしめる爲めに、我々は先づ自然を絶緣して見たので、そうして夫れによりて該意識を明らかに認め得ることが學ばれた。併し該意識を詳しく究明する爲めには、現象學的還元はそれだけで充分でない。我々は更に其の範圍を推し擴めて行かねばならぬ。

先づ自然的世界卽ち物理的及び心理的物理的なるものを絶緣すると共に、評價的及び實際的意識機能によりて構成される一切の個別的諸對象或は文化構成物の一切の種類も亦、絶緣されることは明らかである。かくて一切の自然科學及び精神科學は、自然的立場に立つ科學として、絶緣されることになる。

されば自然物として、又人格的團結或は社會の團結に於ける人格としての人間は、全く絶緣されるのであるが、然らば純粹自我にありてはどうであるか。現象學的還元によりて、現象學的自我も亦一の超越的なるものとされて仕舞ふか。純粹意識の流れに於ても、反省に於ては遂行されたる各思惟は、我考へると云ふ顯表的形式をとるが、我々が先驗的還元を行なふ時は、此の形式は消失するか。是れは甚だ困難なる問題にして、他の幾多の問題を論究したる後に、詳しく論究せねばならぬものであるから、此處では只簡單に左の如く述べるに止める。卽ち世界及び之れに

屬する經驗的主觀性の現象學的絶緣の殘餘として、一の純粹自我が殘存する、（そうして各體驗流に對して夫れ夫れ一の根本的に異なれるものである）。かくて夫によりて一の特異な（構成されない）超越、卽ち內在に於ける一の超越が現はれる。そうして此の超越が各々の「我考へる」に於て演ずる直接本質的役目に就ては、我々は之を一の絶緣に附し得ないであらう。（但し多くの研究に於ては純粹自我の問題は保留され得るのであるが。）併し只純粹意識に就ての直接な、明證的に確定し得られる本質特性及び共所與性（die Mitgegebenheit）だけに限りて、我々は純粹自我を現象學的與料として數へたいと思ふ。但し純粹自我に關して、右の範圍以上に出でゝ立てられたる思想、學說は、總て絶緣に附せらる可きである。

今自然的世界を絶緣したる後に、我々は尙ほ他の一超越を見出す。夫れは純粹自我の如く、還元されたる意識と直接合致して與へられないが、併し云はゞ世界の超越と兩極的に對立して、間接的に認識されるもの、卽ち神の超越である。そうして此の世界外的神的實在は、啻に世界に對して超越的であるのみならず、更に明らかに「絶對的」意識に對しても超越的である。かくて夫れは意識の絶對とは、全く異なれる意味に於て絶對であるので、恰も他方に於ては、夫れが世界の意味に於ての超越的なるものに對立して、全く異なれる意味にて超越的なるものであるが如くである。そうして我々は云ふまでもなく、かゝる「絶對的なるもの」及び「超越的なるもの」の上に、

現象學的還元を推し及ぼすのである。

却説我々は上に述べし如く、總ての意味に於ける個別的なる現象的實在を絶緣するのみならず、又超越的なるものゝ總ての他の種類をも絶緣せんとする。かくて普遍的對象或は本質をも總て絶緣せんとするのである。普遍的對象或は本質も亦、一定の意味に於ては純粹意識に對して「超越的」である、卽ち其の中に眞實に現存するのでない。されど我々は超越的なるものを、無際限に絶緣することが出來ない。先驗的純化は一切の超越的なるものゝ絶緣を意味することが出來ない。是れ然らざれば一の純粹意識は確かに殘存するが、純粹意識の學の可能性は全く殘らないからである。そうして先づ形式的論理學及び本體學に關しては、此等の學科は全く絶緣し得られないものゝ如く考へられる。併し又注意す可きは、此の場合に於ても一定の前定の下に於ては、形式的論理學及び形式的知識の一切の學科を括弧する可能性が、與へられると云ふことである。卽ち純粹意識研究は現象學に、純粹直覺に於て成就さる可き記述的分析以外の任務を課しない、又課す可きでないと前定すると、數學的諸學科の諸理論及び其等の學科の一切の間接的定理は、現象學に對して何等の役にも立ち得ないのである。概念構成及び判斷構成が構成的に行はれない處では、又間接的演繹の何等の體系も建設され得ない處では、數學に於て見られるが如き、演繹的諸體系の形式論（die Formenlehre）は、質料的研究の道具として作用し得ない。

今現象學は實に、先驗的純粹意識の分野を、純粹直覺に於て探究する一の純粹記述的な學科である。されば現象學が、時には依賴せねばならぬかも知れない論理的命題は、全く論理的な公理、例へば矛盾の原則の如きものにして、此等の公理の普遍的及び絕對的妥當は、此等の公理を其の特有の所與性に於て、模範的に明確ならしめ得るのである。かくて吾人は形式的論理學及び本體學を一般的に、絕緣的判斷抑制の中に引き入れることが出來る、又此の點に關して我々が現象學者として遵奉せんと欲する規範の正當なるを、確信することが出來る。但し其の規範と云ふは、卽ち我々が意識其物に於て、其の純粹內在性に於て本質的に洞見し得るものより以外の何物をも要求しないと云ふことである。尙ほ右の事項を明らかにすると同時に我々は、記述的現象學は其等の總ての學科から、根本的に獨立するものなるを、覺るのである。

次に質料的本質學に就て考へて見る。今質料的本質的諸範域に關しては、明らかに絕緣を考へ得られない一範域がある樣に思はれる。夫れは現象學的に純化されたる意識の本質範域其物である。我々は純粹意識を其の特異的諸特殊相に於て、かくて事實學的に（しかも尙ほ經驗心理學的ではなく）研究せんとする目的を定立する時でも、意識の先天的なるものを缺くことが出來ないであらう。事實學は、其の特有の領域の個體的對象に結び附けられる本質眞理を運用する權利を、放棄することは出來ない。併し我々の目的は旣に屢々述べし如く、現象學を先驗的に純化さ

れたる意識の本質學として確立するに在るのである。

我々は右の目的を追求するに於ては、現象學は夫れに特有のものとして一切の「內在的本質」（卽ち全く一の意識流の個體的出來事に於てのみ、其の中に流れる何れかの特異的體驗に於て個別的となる處のもの）を包括する。併し此處に左の點を洞察することが根本的に重要である。卽ち殆んど一切の本質が右の範域に屬するのでないこと、寧ろ個體的對象に對すると同樣に、內在的なるものと超越的なるものとの區別が、夫れに相應する本質に對しても存すること。かくて「物」「空間形態」「運動」「物的色」等、更に「人間」「人間的感覺」「心意」「心意的體驗」「人格」「性格特性」等も亦、超越的なるものである。そうして我々が現象學を、內在的意識諸形態の純粹記述的本質論として、或は現象學的絕緣の枠內に於て、體驗流の中に把捉し得られる出來事の純記述的本質學として建設せんとするならば、超越的に個體的なる何物も此の枠內に屬せず、夫れと共に又「超越的本質」（其の論理的場所は寧ろ夫れ夫れの超越的對象の本質論の中にあるであらう）も此の枠內に屬しないのである。

かくて現象學は其の內在性に於て其等の本質の何等の實在設定をも亦、其等の本質の妥當或は不妥當に關して、或は其等の本質に相應する諸對象の觀念的可能性に關して、何等の言明をもなす可きでなく、又其等の本質に關する何等の本質法則をも確立す可きでない。

超越的本質的諸領域及び諸學科は、眞に純粹體驗領域に己を拘束せんとする現象學に對して、根本的には何等の前提をも寄與することが出來ない。現象學をまさしく其の純粹性に於て確立せんとするのが我々の目的であり、そうして其の純粹性に於て意識的に進んで行くことに、又最大哲學的關心が結び附くのであるから、我々は原本的還元を、一切の超越的本質的諸領域及び之れに屬する諸本體學に、明らかに推し擴めて行くのである。

かくて我々は現實的なる物理的自然及び經驗的自然科學を絕緣し、又本質學即ち物理的自然對象に本質的に屬するものを研究する學科をも、絕緣するのである。幾何學、運動論、物質の純粹物理學等は括弧される。そうして我々は更に動物的自然の一切の經驗科學、及び人格的團結に於ける人格者や、歷史の主體として、文化運載者としての人間の、一切の經驗的精神科學を絕緣し、尙ほ文化諸形態其物等をも絕緣したと同樣に、今や其等の對象に相應する本質學をも絕緣する。但し我々は之を豫め、又觀念に於てなすのである。是れ今日までには此等の本質學（例へば合理的心理學、社會學等）は、まだ全く基礎附けられて居ない、少なくも純粹な異論なき基礎附けに達して居ないからである。尙ほ右の論述によりて、現象學が總ての他の學問から、かくて質料的本質學からも絕對的に獨立するものなることが、確立されるのである。

以上略述せるが如き現象學的諸還元の組織的考察は、現象學的方法（更に先驗的哲學的研究の

方法一般）に對して、一の重要なる意味を有するものである。現象學的方法の「括弧に入れる」と云ふことは、吾人をして常に左の點を憶ひ起させる方法的機能を有する。即ち夫れ夫れの實在範域及び認識範域は、先驗的現象學的として研究さる可き諸範域の外に存すると云ふこと、及び其等の括弧に入れられたる諸範域に屬する前提の總ての闖入は、不合理なる混雜、眞のメタバシス（論辯及び論證に於て、一の範域から異なれる範域へ跳込むこと）の告示であること。現象學的範域が自然的經驗立場の範域の如く、直ちに自明的に與へられるならば、或は經驗的に空間的なるものから出發して幾何學的範域に移り行くが如くに、單に自然的經驗立場から本質的立場に移り行く事に依て自から現はれるならば、種々困難なる思慮を伴なふ處の面倒な還元は、全く必要でないことゝなるであらう。又誤まれる「メタバシス」への絶へざる誘惑が、殊に本質的諸學科の對象の解釋に於ても、存續しないならば、個々の諸步武或は諸階段を區別する爲めに、心を煩はす必要もないであらう。然るに諸等の誘惑は甚だ强大にして、個別的範域に於ては一般的誤解から全く解放されて居る人々さへも、之れに陷り易い危險があるのである。

此處に先づ注目す可きは、吾人の時代に於て非常に擴まつて居る處の、本質的なるものを心理化せんとする傾向である。觀念論者と稱せられる多くの人々さへも、右の傾向に陷つて居るので、一般に觀念論的方面に於ける經驗論的見解の影響は强大である。觀念、本質を「心理的構成物」と見る人々、意識諸操作（夫れに於て、物的色、形體等を有する物の直觀に基いて、色、形體

等の「概念」が得られる）に關して、當面に生起する色、形體等の其等の本質の意識を、其等の本質其物と混同する人々は、現實的實在成分としての意識流に、根本的には之を超越するものを附與するのである。そうして夫れは一方に於ては心理學の墮落或は破滅を招き、他方に於ては現象學の墮落或は破滅を招く。かくて求められたる現象學の領域が、眞實に見出さる可くは、右の點を明らかにすることが、甚だ肝要である。併し夫れは當然我々の方法によりてなされるもの、卽ち先づ第一には本質的なるもの一般の普遍的辯護に於て、次に特に、本質的なるものゝ絕緣としての現象學的還元の說との結合に於て、なされるものである。

尙ほ我々は此處に認識論上から、獨斷說と批判說との反對を考察し、還元に附せられる一切の學問を、獨斷的學問と稱することの適當なるを述べて、更に現象學の特性を闡明するに資することゝする。今本質的本源からして左の事項が洞察される。卽ち還元に引き入れられる諸學問は、まさしく批判を要する處の、しかも其の批判たるや、其等の學問が根本的には夫れ自身で成就し得ない處の學問であること、及び他方に於ては、總ての他の學問に對して、同時に又己れ自身に對しても批判をなす特異な任務を有する學問は、現象學に外ならぬこと。一層詳しく云へば、現象學の著しき特性は、其の本質的普遍性の範圍內に、一切の認識及び學問を、殊に其等のものに於て直接的に洞見的なるもの、或は少なくとも其等のものが眞實なる認識であるならば、直接的に洞見的であらねばならぬものを、總て包括すると云ふことである。かくて何れの學問に關する「可能性」の根本問題も、依て以て答解される一切の本質的（無制約的に普遍妥當的）認識は、現象

學の中に含まれて存するのである。されば現象學は應用現象學としては、根本的に特異なる各學問に於て最後の評價的批判を下し、又夫れによりて殊に其の學問の對象の「實在」の最後の意義規定、及び其の學問の方法論の根本的解明を與へるのである。そこで現象學は云はゞ全近世哲學の秘密な憧憬であることが理解される。

驚く可く意味深奥なるデカートの基本考察に於て、既に現象學への傾向が認められる。次に又ロック派の心理學主義に於て、ヒュームは殆んど其の領域に觸れて居るが、併し彼の目はハッキリして居なかつた。そうしてカントは漸く正當に現象學の領域を注視したので、彼の最大直覺は、我々が只現象學的範域の特有性を充分に闡明した時にのみ、完全に會得されるのである。さればカントの心眼が現象學的分野に注がれて居たことは明らかである。併し彼は尙ほ此の分野を自分のものとなし、之を一の特有の嚴格なる本質學の活動界として、認識し得なかつた。かくて例へば純粹理性批判第一版の先驗的演繹は、本來現象學的地盤の上に活動して居るが、併しカントは之を心理學的なるものとして誤解し、隨ふて又之を放棄したのである。

以上述べし處によりて、我々は何故に、還元に附せられる諸學問を、獨斷的學問と總稱し、そうして之を全く他の次元の一學問としての現象學に、對立させるかを辨明し得ると思ふが、夫れと同時に我々は獨斷的立場と現象學的立場とを對立させるので、此の際には自然的立場は明らかに獨斷的立場の特殊的なるものとして、之れに從屬するのである。

終りに少しく注意したきことがある。是れまでに述べし處の、特に現象學的なる諸絶緣は、個

體的存在の本質的絶縁から獨立するものであると云ふ事情に伴なふて、左の如き問題が起る。卽ちされば其等の絶縁の枠内に於て、先驗的に還元されたる體驗の一の事實學が、又可能でないかと云ふ問題である。そうして此の問題は、總ての根本的なる可能問題の如く、只本質的現象學の地盤に於てのみ、解決され得るものにして、つまり現象學的本質論を究明する前に、素朴的に一の現象學的事實學を以て始めんとする各企圖は、何故に無意味であるであらうかは、明らかに理解されると云ふ樣な仕方にて、答解されるのである。此處に現象學外的諸事實學の外に、之れと平行し、同位に置かれる一の現象學的事實學は存在し得ないことが示され、そうして夫れは實に左の理由からして示されるのである。卽ち一切の事實學の最後の評價は、總て其等の學問に相應する事實的なる、及び事實的可能として確定されたる、現象學的連結の一の統一的結合に導くが、其の結合されたる統一は、誤測されたる現象學的事實學の分野に外ならぬと云ふ理由である。かくて此の學問は其の主要なる部分に於て、本質的現象學によりて可能となれる處の、普通の諸事實學の「現象學的轉向」である。そうして只、夫れより以上に進んで如何程遂成さる可きかと云ふ問題が殘るだけである。

以上述べ來れる處によりて、フッサール氏が「現象學的基本考察」として論述されて居ることの大要を、特に現象學的還元の意味を可なり詳しく究明せんとする主意から、明らかに示すことが出來ると思ふが、次に同氏が「現象學の方法論及び問題論」に就て論述されて居る大要を、特にヤハリ現象學の方法をかなり詳しく究明せんとする主意から、說述したいと思ふ。